初修言語科目が大学教育において果たす役割の探索的研究: 初修中国語クラスを例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 英希, 夏, 世明, NISHIMURA, Hideki Heidi, XIA, Shiming Trevor メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069174

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

初修言語科目が大学教育において果たす役割の探索的研究：初修中国語クラスを例に

An Exploratory Study Investigating the Role of Foreign Language Courses for Beginner in College Education: A Case Study of Beginner Chinese Language Classes

西村 英希*、夏 世明†

Hideki Heidi NISHIMURA and Shiming Trevor XIA

概要

2022 年度末に課した受講者エッセイ『私にとっての中国語』では，初修言語としての中国語の授業が彼らの大学生活に好ましい影響を与えていたとの声が複数寄せられた。本稿では，年間を通して初修言語の学習に取り組むことと安定した満足度の高い大学生活を送ることの正の関連について，学生たちの生の声の分析を通して指摘する。また，年間を通して特定の教員，学習者と定期的に顔を合わせる機会を保証されている初習言語の授業が学生の心理的安全性に寄与し，結果的に高校教育から大学教育への橋渡しとして効果的に機能している可能性に触れ，初習言語科目の存在意義を改めて強調する。

Many first year students reported that their first experience of taking Chinese language classes had a positive impact on their university life in their "Chinese for Me" essay assignment at the end of the 2022 academic year. This paper examines the relationship between students' participation in Chinese class and their satisfaction with university life, based on their comments in the essays. We highlight the importance of foreign language classes, as they offer students an opportunity to interact with faculty members and peers on a regular basis, which can contribute to their psychological safety in a new environment. In addition, we emphasize that foreign language courses serve as an important first-year education that helps bridge the gap between high school and college.

1. はじめに ― 大学 1 年生の学習が成立する上で求められる必要条件

大学の教員は，ともすると安易に，大学１年生を自立した学習者として捉えがちである。それには，例えば彼らが受験という猛勉強の過程を経て入学してきたこと，年齢的には既に選挙権を付与され独立した個人として国家に対して意思表明をし得る存在であることなど様々な理由があるだろう。よく言えば彼らを一人前の大人として扱っていると言えるし，悪く言えば彼らの実情に向き合わずに教員が果たすべき責任を無意識のうちに放棄してまっている可能性も考えられる。

果たして大学１年生とはどのような存在なのか，また彼らの大学における効果的な学び

* 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系

† 関西大学外国語教育学研究科

が成立するためには何が必要で，初修言語科目が果たすことのできる貢献とは何なのか。以下，学生から寄せられたエッセイの内容を手がかりに初修言語が果たすべき役割について述べていく。

2. 初修言語の授業が大学１年生の生活に与え得る影響 — 学生の所感とその分析

この節では，実際に学生から寄せられたエッセイの内容を例に，初修言語の授業が大学生の生活にもたらす作用について考察していく。当該エッセイは筆者の一人（西村）のクラスの授業課題（評価には盛り込まないことを明示）として「私にとっての中国語」をテーマに書いてもらった文章の抜粋であり，解答の内容はあくまで偶発的に寄せられたものであることを断っておく。

2.1. 学生 A さんの所感と分析

> “勉強が進むにつれて，語彙や文法など覚えることが多く，少しつまずくことがありましたが，私は一年間中国語を楽しんで勉強することができました。それは，先生方や仲間に恵まれていたということが一番大きいのですが，中国語という勉強目標に向かって勉強することによって，堕落するという不安を防いで気持ちを充実させることができていたからでもあります。大学生になると高校の時よりもさぼることが簡単になると思います。私は入学したての頃遊びに遊んでいて勉強していない罪悪感に苛まれることが多かったです。しかし，中国語という勉強目標に向かって勉強することによって，自分は頑張っているという満足感を持つことができました。人間は頑張れないときが一番つらいと思うので，本当に中国語という目標ができてよかったと感じます。(中略)学びたい言語は人によって違うと思いますが，一年生のうちは第二外国語を勉強目標にして頑張ると勉強習慣が損なわれなくていいと感じます。勉強をやって遊んだほうが，いいと思うし，心持が違うと思います。(中略) 中国語は一年生の私にとって大学に慣れながら勉強習慣を保つための目標でした。”

A さんの感想には「堕落」，「不安」，「罪悪感」など幾つかの重要なキーワードを見てとることができる。受験を終えたばかりの大学１年生は入学直後に羽目を外してしまいがち，とはよく言われることだが，小学校から中学校への移行時に比べ，高校から大学への移行は親元を離れることによる環境の変化や，知人の少なさなどを伴うことが殆どであろう。大学で学ぶ内容は多様で，カリキュラムの自由度も高く，一般的に所属学級はない。このような高校とは異なる大学のシステム上，学びに対する自主性が常に求められるため，適応困難な学生は続出し，結果，大学の初年次教育は社会的にも注目される存在となっている。高校までの学習や受験勉強期には統一試験や各大学の試験によって大凡の学習範囲と傾向が示されている故に，その指標に沿って学習を進めればゴールを意識しやすい。しかし，大学入学と同時に評価方式を含む仕組みは大きく変わるため，学生は唐突に多方面的な適応を迫られることになる。このような時期において，ある意味高校までと極めて大きな乖離がある訳ではない初習言語の学習は，A さんが述べるように，新しい環境における「自己充足感」や「安心感」という心理的インフラを付与してくれる貴重な存在として機能し得る可能性を持っ

ている。

新入生の大学適応は学業面と対人面に大別される。学業面については，高校とは異なる大学の仕組みの理解，履修登録，講義出席と課題遂行，孤独な作業を伴う多くのストレッサーに対処しながら着実にスケジュールをこなしていくことが求められる。対人面については，多くの場合，同質な規範を共有・適応している高校までの「快適な空間」（comfortable zone）から，新しい規範を探り合いながら新しい友人を作り，教員とコミュニケーションを取らなければならない必要が現れてくる。初年次はまさにこのような新空間適応への正念場であり，A さんのように，心の奥底では頑張りたいとは思うものの，果たしてどのように頑張ればいいのか分からない不安を感じている学生に如何にして心理的安全性（psychological safety）を担保し新たな環境に適応しながら学業に専念できる条件を付与できるかが問われている。

学生に限らず，新しい組織に所属すると，その組織への適応が求められるが，社会学ではこの現象を組織社会化と捉える。組織社会化とは個人が組織の一員になるために，必要な態度や行動，知識を習得するプロセスのことである（Van Maanen & Schein 1979）。近年，組織社会化の挫折により就職後 3 年以内に離転職を選択する若年就業者は 3 割に達しているとされる（厚生労働省 2021）。組織社会化研究ではこのような挫折を「一方における自分の期待・夢と，他方における組織での仕事，組織に所属することが実際にどのようなものなのかのギャップ」と定義し，リアリティ・ショック（reality shock）と呼ぶ（Schein 1978）。これは，大学という文脈においては「大学生が大学内役割を引き受けるのに必要な社会的知識や技術を獲得・適応する過程」と解釈できる。多くの大学生はこのような大学における社会化過程で起こるリアリティ・ショックへの対応を求められる。中でも新入生はその経験を全く持たないゆえに，適応がより困難な場合が多いとされている。そこで適応失敗が積み重なると「学習性無力感（learned helplessness）」につながり，その後の大学生活が雪崩式に崩れていく危険が大いにある。

ベネッセ調査（2022）によれば，2020 年度の新入生は 2016 年度と比べて「成長実感がない」と回答した割合が増加し，全体の 4 割弱にも達している。「学習やスポーツで競い合う友達がいない」と回答した割合も大幅に増加し，全体の 5 割をも超えているという。また，全国大学生活協同組合連合会が実施した第 58 回学生生活実態調査結果（2023），大学生活が充実していないと回答した大学生のなかで「生きがいが見つからない」と「友達・対人関係」を取り上げる 1 年生の割合がそれぞれ 55.2%と 45.7%で最も大きくなっている。これらから，大学 1 年生は特に深刻な状況に置かれており，またコロナ禍では当該状況がコロナ前よりも一層悪化していることがわかる。

初年次時点での適応は，その後の適応とも関連し，大学生活全般への適応を考える上でも極めて重要である。大学入学後の挫折がその後の大学生活からの大きな脱落に至らないよう，より一層のケアが必要であることは複数の研究で指摘されており（植村・小川・吉田 2001；山田 2006；広沢 2007；古里 2018），今後もより多くの方策の提示が求められる。

2.2. 学生 B さんの所感と分析

“中国語クラスは，同じ学類の人 30 人近くと毎週 2 回会う機会があります。授業を通じて交流が深まり，友人もできました。また，他のクラスメートの頑張りに感化されたことで，1 年間諦めずに走り切れたと思います。

他の第二外国語クラスに比べて，勉強量は多くなると思います。しかしその分，中国語のレベルは格段に上がり，充実したものになるはずです。1 年生が取る授業は GS 科目（教養科目）が中心なので，何か一つを究めて学ぶことはあまり出来ないと思います。唯一 1 年間通して学べるのが第二外国語です。第二外国語を頑張って学ぶことが，1 年生の頃に究めた一つとなり，今後の大学における学びの自信に繋がると信じています。”

B さんの内容ではまず共に学ぶ友人やクラスメートの存在の重要性が強調されている。一見すると個人競技に見える語学学習においても，一人で孤独に努力を継続することは容易くなく，環境や他者の存在が重要なファクターとなっていることがわかる。Lave & Wenger（1991）は状況的学習論（situated learning），正統的周辺参加論（legitimate peripheral participation: LPP）を理論的背景として実践コミュニティ（Communities of Practice: CoP）の概念を提唱した。ここでは学習は状況に埋め込まれた活動であり，具体的で明確な文脈を持った活動の中でのみ行われる一種の社会として捉えられている。例えば，状況的学習においては個人の中にどれだけの知識が蓄積されているかを見るのではなく，置かれている環境の中で人的・物的資源を活用していかに行動していけるかが焦点となる。Wenger et al.（2002）は実践コミュニティを「あるテーマに関する関心や問題，熱意などを共有し，その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」と定義している。大学という文脈に置き換えると，履修科目クラスはミクロ的に同じ教室（またはオンライン空間）で教員・受講生が相互交流を通じて理解を深めていく実践コミュニティであると言えよう。これを B さんのケースに当てはめると，B さんは初修中国語クラスという実践コミュニティで定期的かつ高頻度で恒常的な成員と環境を共にすることで心理的安全性が強化され，そのような環境だからこそお互いに切磋琢磨しながら学習を続けることができたと考えられる。

また 1 年次は広く雑多な教養科目を中心に各クォーター(1 クォーター=8 回)で分散的に履修することから，その環境下において 1 年を通して連続的に学べる第二外国語の重要性が述べられている。これは A さんの記述とも共通するが，1 年次に明確な活動を経て自信を育める教科の存在の大切さを示していると言えるだろう。

2.3. 学生 C さんの所感と分析

“中国語の授業では，毎回ディクテーションの小テストがあります。私は漢字を書くのが好きなので，ディクテーションの練習を割と楽しんでやっていました。そして，小テストを頑張ろうとすることが，中国語の勉強を一年間続けるモチベーションにつながったと思います。少し意味が分かると，もっと分かりたいと思うようになります。私にとって

中国語は，新しいことを学ぶのは，楽しいことだと実感させてくれる存在です。”

C さんは小テストを頑張ろうとすることが１年間を通してのモチベーションになったと述べており，また「漢字を書くことが好き」とも述べている。前者からは，長期的な目標の達成には日々の地道なスモール・ステップの積み重ねが大事であり，そのスモール・ステップを踏むプロセスの設定が如何に大切であるかが見て取れる。

後者の特徴に関しては，やや主観的な粋を出ない分析にはなってしまうが，「文字（特に表意文字）をきれいに書く」という意識が強く働いている人の学習効率，学習意欲という意味でも非常に興味深い。

2.4. 学生 D さんの所感と分析

“一夜漬け的な勉強から脱却するべく復習と文法理解に重点を置こうと決意した。それからはノートの見栄えも多少変わった。最初の頃は見返してやる気を失せさせるような出来だったり，もはやノートを忘れて白紙だったりと散々だった。後半はそれなりに文法や単語のつながりが書かれているようだ。”

D さんは記述の中で「見栄えの良いノート」の効用に触れている。C さんの漢字に関する記述と通じるところがあり，字やノートをきれいに書いてそれを自分で見ることには満足感を与える効果がありそうだ。これは仮説の域を出ないが，「きれいに字を書こうとする意識」は恐らく「ノートをきれいに整理する」ことにも副次的に繋がっており，成績と何らかの相関性があるのではないかと予測する。これについては論考を改めて考察したい。

3. 高大接続の鍵は「心理的安全性の担保」

上述の A さんの感想にあった「堕落」，「不安」，「罪悪感」への恐怖，B さんが触れた「今後の大学における学びの自信に繋がる」という点，そして C さんの「小テストを頑張ろうとすることが，中国語の勉強を一年間続けるモチベーションにつながった」という言葉からは「不安を払拭したい」「継続的に学習するためのきっかけが欲しい」といった根源的な欲求が伝わってくるが，これは所謂マズローの欲求 5 段階説(Maslow's Hierarchy)において２番目に低い欲求である（Mathes 1981）。最も低く位置づけられるのが「生理的欲求」であり，決して高次の欲求ではないより基盤的な欲求と言える。付け加えると，上述の学生は皆１年間を通じて，最も高いグレードである成績「S」を取り続けた学生である。そんな彼らでさえも常に「頑張れないことへの不安」と闘っており，自分の今後に繋がる自信をなんとか得たいと願いながら努力していることが見て取れるのではないだろうか。

近年，各所で「高大接続」の重要性が叫ばれているが，多くの議論は学術的作法によるレポートを執筆したり，議論を行うための「アカデミック・スキル」といったテクニカルな内容に偏っている嫌いがある。それらは確かに重要だが，筆者らは前述の学生たちの所感を目にするにつけて，教育機関が求めるものがあまりに当然視され，学生たちの心理的状態の観察が置き去りにされがちであると考えた。以下，本節では，大学１年生の教育を行う側（大

学）と受ける側（学生）の間に存在する認識の乖離と，その解決手段として初修言語科目にできる方策について考察する。

3.1. 大学 1 年次は高大接続のモラトリアム期

大学での授業をどのように受ければより効果/効率的かをテーマに書かれた書籍には枚挙にいとまがない。それらは往々にして大学生活を「効果的に/より良く過ごす」ことに主眼を置いているものだが，どうもそれらが上手く機能していないように感じている。教育機関の授業は基本的に学生のために良かれと思って提供されているのであるが，学生にそれらを受け入れる準備が十分にできていないと，授業は全く意味をなさなくなる。それを「個別学生の能力に依る」と見る立場は「1 年生は皆，大学の授業を受け入れる準備があらゆる面で十分にできた上で入学してきている」という前提に立った楽観的なものだろう。巷にあふれる上述の「大学での授業をどのように受ければより効果/効率的か」という点を重視した書籍はこれに類するものだと考える。『大学 1 年生の歩き方：先輩たちが教える転ばぬ先の 12 のステップ』（トミヤマ・清田 2017）では不安でいっぱいの大学 1 年生が 1 年次で何に気をつけながら過ごせばなるべく転ばずに乗り切るかに焦点を当てて論じている。「なるべくつまずかないようにする」，「つまずいた時はどうするか」など，「大きな支障が出ないように過ごす」ための言わば心理的防波堤を作ることに重きが置かれているとも言えるだろう。金沢大学を例に取ると，程度さこそあれ，基本的に厳しい受験をくぐり抜けてきた学生たちであるため，学ぶ能力は全国的に見ても決して低くない[3]。2 節で触れた学生たちの所感が私たちに教えてくれているように，1 年目の最重要課題はやはり「如何にして新たな環境(大学)における自分の学習習慣・リズムを作るか」ということだろう。当該書籍の「あとがき」に以下の記述がある。最後に少々長いが引用しておく：

> 大学の 4 年間で何を学び，どう行動すべきか書いた本は山のようにあるのに，どういうわけか最も不安な 1 年目の過ごし方について詳しく書かれた本はない。――その事実に驚き，なにかわたしたちにできることがあるはずだという思いで，この本を作りました。
>
> 大学に入ると，これまでとはくらべものにならないくらい世界が広がります。(中略)
>
> 読者の中に新入生を子どもに持つ親御さんがいるかもしれないので書いておくのですが，多くの学生が，親の束縛から自由になりたいと願う一方で，本当に辛いときは何も言わずとも察して欲しいと思っています。親というのはどうしても子どもの成績が気になってしまうものですが，本書を通じて，彼らが抱える悩みの重層性についても知っていただけたら嬉しいです。(『大学 1 年生の歩き方：先輩たちが教える転ばぬ先の 12 のステップ』「あとがき」より)

3.2. Twitter において「写経」と呼ばれる外国語ディクテーション

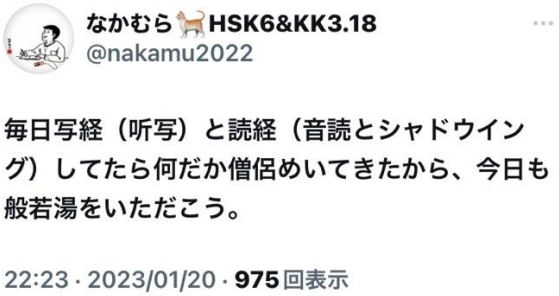
では，具体的に大学 1 年生の不安を取り除く方策としてはどういったものが考えられる

[3] ベネッセ マナビジョンによる 2022 年度の調査によれば、学校教育学類を除いて初修言語の修が義務付けられている人間社会学域の偏差値は 59～61。

だろうか。C さんの内容（2.3）は「（中国語）ディクテーション」がこの目的を達するために効果的なツールであることを示唆している可能性がある。

ディクテーションは中国語で“听写（聴写）”と書く。現代語中国語の“写”は「書く」の意だが，この意味が生じるのは唐代以降である[4]。現代語の“听写”は文字通り耳で「聴いた（听）」音を「書く（=写）」行為を指す。

Twitter で「写経」と検索をかけると少なくない言語ディクテーションに関わる投稿がヒットするが，ここからは中国語，英語など言語を問わず「外国語のディクテーション＝写経」という認識が定着していることがわかる[5]。



このツイートでは，写経における「（経典を）文字で再現する（=写す）」行為から「文字で再現する」部分を抽出し「（音声を）文字で再現する」ディクテーションに重ね合わせることで二つの行為に共通点を見出している。また読経を「(モデル音声を)声で再現する」行為と解釈することで音読とシャドウイングに結びつけている。そもそもなぜディクテーションを写経と結びつけるのだろうか。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』には以下の解釈が見える(下線は筆者)：

> 仏教の経典の文を書写すること。経典は初め暗唱によって伝えられたようであるが，次第に書写されるようになった。(中略) 仏教の典籍が中国に移入され，翻訳されると，経典の書写はきわめて盛んとなり，いわゆる一切経の書写も行われたが，印刷術の発達とともに減少した。日本でも奈良時代に始まり，きわめて盛んであった。<u>その後写経の習慣は衰微したが，なお写経の功徳に対する信仰のもとに，祖先の供養，自己の福利などを願って行われ，今日も行われている。参考文献リストは当該分野の標準形式に従うこと</u>。

下線部にあるように，写経の根本には「功徳に対する信仰」があり，その行為を成すことは心の拠り所を得ることにも繋がっている。中国語の学習期間において，「ディクテーション」という既知の情報の書き取り，言ってしまえば単純な刷り込み作業を定期的なルーティンとして経ることで大学における学習習慣及びリズムができ，組織社会化が促進され，結果として精神的な安定を図ることができるものと推測される。

---

[4] 橋本陽介『中国語とはどのような言語か』東方書店：67 頁。

[5] https://twitter.com/nakamu2022/status/1616426085234929664?s=46&t=N3N5jUp5xblrUPTGtkxvRg

「写経」は言語学習や言語習得分野の研究においてはフォーマルな学術用語ではないが，近年，プログラミング教育分野において散見される。例えば岡本など（2013）は「初学者を対象としたプログラミングの演習過程のうち，サンプルプログラムの模倣から始めて，学習者自身がサンプルプログラムにある命令，文法などを一部改変したり，組み合わせたりするなどして試していくまでの過程」を「写経型学習」と定義している。ここでは，本来の「書写」，つまり模倣の過程に加えて，その後の応用的な学習も含めているが，「写経型学習」という名称から模倣の占める重要さが見て取れるだろう。

また 2.3 と 2.4 で触れたように，物理的に「書く」という行為自体にも多くの意義が包含されているように思われる。字を紙に書くのも，ノートを取るのにも通じるが，自らの身体で筆圧を調整しながら書き残す作業それ自体の効用である。例えば同じディクテーションという作業をタブレット端末に書き込む形で行った場合と，紙に書き取った場合でどのような違いが現れるのか，など，今後の検討課題としたい。

3.3. 高大接続方策としての「写経型言語学習」

大学の学習が高校までの学習とは全く異なるとはよく言われる。多くの大学の初年次教育で『アカデミック・スキル（大学におけるレポートについて）』や『プレゼン・ディベート論』などに類する科目が必修化されていることからもわかるように，大きくは，知識を蓄積した結果よりもレポート，発表課題などを通じてどのように調査しアウトプットしたかといったプロセスから結果までが総合的に評価される点に違いがあると言えるだろう。問題は 1 年生の多くがそれらの授業を受けることで果たしてシームレスに大学での学習形式に適応していくことが本当の意味でできているのかである。この点については今後さらなる調査と検討が必要にはなるが，2 節で紹介した学生たちの所感が一つの回答になっている可能性は十分にある。

こなすべき課題とそのやり方，及び到達目標がかなりの程度まで明確に示されることで心理的安全性が保証されている義務教育期とは異なり，大学では自主的にゴールを設定し学びを進めていくことが求められる。とりわけ両者の移行期間にあたる 1 年次は手探りの期間となるため，高校までで培った既存のやり方がある程度通じ，その基礎の上により高次の内容を積み上げていくことのできる「写経型学習」のような仕組みがとりわけ必要なのではないだろうか。例えば Onishi (2016)は第二言語としての英語の学習経験が第三言語（ここでは韓国語）を学ぶ際に音韻面での優勢性をもたらすことを示している。初修言語の学習は「言語学習」という意味で，多くの学生は高校までに経験する英語学習の経験及び知識を生かして，程度差はあれ，より効率的，或いは効果的に学ぶことができると考えられる（もちろん，それを達成するために教員や教材，環境の質ができるだけ担保されるべきであることは言うまでもない）。言い方を変えれば，言語の学習にはそれ自体に「写経型学習」の要素が内在しているとも言える。第二言語として英語を学ぶ際には，母語である第一言語を参照しながらの指導，学習が効果的であるし，第三言語を学ぶ時も同様に第一，第二言語の知見を生かしながらの学習が可能になる。このような過程を大学 1 年次に経ることで，大学という新環境に伴うリアリティ・ショックがかなりの部分軽減されると考えられる。学生は「大

学の授業に適応できている」「成長している」といった手応えを感じながら，安心して新たな挑戦に取り組み，次のステップに進んでいけるのではないだろうか。

以上のように，初修言語の授業には，大学での本格的な学習への橋渡し的な役割を果たせる可能性が大いにある。この点を想定して，学習者が心理的安全性を担保された上で，より深い考えを巡らせることのできる機会をカリキュラム，授業内容に盛り込んでいくこともこれからの初修言語教育にはますます求められていくだろう。

4. 結語に代えて：教養科目としての初習言語が学生に対して持つ影響力

大学における初習言語（多くは英語に続く第二外国語）の授業は，近年少なくない大学で縮小を余儀なくされる傾向にあるが，その存在意義は本稿でも触れたように非常に大きなものがある。筆者（西村）はこの１年間，総合教育部（いわゆる「教養部」に相当し，２年次に成績順で進学先が決まる）の担任を務め，年 3 回の個人面談（これ以外にも適宜必要に応じて実施），及び半年に渡る初年次科目（『アカデミック・スキル』と『プレゼン・ディベート論』）を 17 人規模で担当した。実際には，それら全てを合わせても，固定メンバーで実施する初修言語 1 年間の授業がもたらす心理的安全性には及ばなかったのではないかと感じている。もちろん授業のやり方そのものや，学ぶ内容の具体度[6]にもよるが，初修言語 1 コマの授業では単純に，学期中の毎週，教員及びクラスメートとの計 32 回（定期試験 4 回を含む）の対面機会及びインタラクションが保証されるため，その効果は非常に高いと思われ，多くの大学では初修言語科目に 2 コマの時間を割いている（王・古川・砂岡 2016）ことを考えると，その効力はさらに大きくなる。不確実性減少理論（uncertainty reduction theory）によれば，人は未知の他者と出会った場合，その他者に対する不確実性を減少させ，予測可能性を増加させるように動機づけられる（Berger & Calabrese 1975）。この見地に立つならば，特に大学 1 年生にとって 1 年間の初修言語授業は不確実性を減らすに十分な時間・場所・人的リソースを提供される実践コミュニティであると言えよう。

また近年，高大接続の議論においても「受け身の教育から能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換」が柱の一つに位置付けられる[7]中で，授業活動はこれまでになくインタラクティブな場として機能するようになっている。真の意味での学習が機能するには，課題目標がある程度明確かつ具体的に設定された(ディクテーションも含む)個人学習と，総合的かつ緩やかな，討論などインタラクティブな過程を含んだ集団学習とが適度に混合された過程であろう。前者には講義型の授業も含めて基礎知識をしっかりと定着させる機能を持たせ，後者では明確な唯一無二の回答を導き出すことは目的とせず，教員及び学習仲間と共に考え，高め合うことを目標とする。人生という長い道のりをより良く過ごしていく上では

---

[6] 方法論は往々にして抽象的な内容になりがちであるのに対し、初修言語で学ぶ外国語には基本的に対象となる具体的な語彙や文法、文脈が細かに設定されている。

[7] https://kotobank.jp/word/%E9%AB%98%E5%A4%A7%E6%8E%A5%E7%B6%9A%E6%95%99%E8%82%B2-894832

幾度となく重要な選択を迫られる場面があるだろうが，教室内での活動には，白黒つけがたい現象に向き合ったり，他者と積極的に考えを共有することで，自分なりの回答を見つける方法が少しずつ身についていく，という側面もある。同時に，人が継続的に学んでいくにあたっては「心理的安全性」の確保が不可欠であることは忘れてはならない。特に１年次の学生にとって初習言語科目はその機能を十分に果たす条件を兼ね揃えているのではないだろうか。

本稿で述べてきたように，初習言語科目は高大接続を可能にする繋ぎ役として機能する可能性がある。それは言語の学習に，良くも悪くも高校までの学習に似通った部分があるからである。近年軽視されがちな傾向にあり，大学によっては教育学部，法学部などでも選択科目化されることのある初修言語だが，この機会にその価値を改めて提起したい。

本稿で触れられなかった点として，定量的な分析の実施と，ディクテーション小テストの成績と総合成績との関連性がある。大学１年生が大学生活においてどのように自信を深め，効果的な学習に歩みを進めていくのか，またディクテーションという作業がその中でどれだけ有用で，かつ全体の成績との関連性はあるのかなどの検討は今後の課題としたい。

最後に，授業に意欲的に取り組んでくれた学生たち，また提出物のコメント欄や授業後の質問で建設的かつ生産的に自らの考えを表明し続け，授業と本稿に貢献してくれた学生たちに心から感謝したい。エッセイ課題「私にとっての中国語」は成績に換算される課題ではなく，また字数の要求がなかったにも関わらず，少なくない学生が A4 用紙１枚，多い人では２枚にも及ぶ熱のこもった文章を提出してくれた。ここに改めて感謝の意を表したい。

参考文献

1. Van Maanen, J., & Schein, E. H. (1979) Toward a theory of organizational socialization. In B. M. Staw (ed.), *Research in organizational behavior*. Greenwich, CT: JAI Press.
2. 厚生労働省（2021）「新規学卒就職者の離職状況を公表します」（URL：https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177553_00004.html　2023 年 3 月 15 日閲覧）
3. Schein, E. H. (1978) *Career dynamics: Matching individual and organizational needs.* Boston, MA: Addison-Wesley.
4. ベネッセ（2022）「第 4 回大学生の学習・生活実態調査　結果速報」（URL: https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/20220728_release.pdf　2023 年 3 月 15 日閲覧）
5. 全国大学生協連（2023）「第 58 回学生生活実態調査概要報告」（URL: https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html　2023 年 3 月 15 日閲覧）
6. 植村善太郎・小川一美・吉田俊和（2001）「大学生の適応過程に関する縦断的研究（2）－大学生の学習への取り組み、および大学生活満足感に関連する要因の検討－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』48, 29-43。
7. 山田ゆかり（2006）「大学新入生における適応感の検討」『名古屋文理大学紀要』6, 29-36。
8. 広沢俊宗（2007）「大学新入生の適応に関する研究（1）―学習面での適応-不適応に関わ

る諸変数の検討―」『関西国際大学研究紀要』8, 121-138。
9. 古里由香里（2018）「初年次セミナーが留年・休学・退学に及ぼす効果―「大学生活基礎力ゼミ」を事例にした計量分析―」『信州大学総合人間科学研究』12, 90-102。
10. Lave, J., & Wenger, E. (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press.
11. Wenger, E., McDermott, R., & Snyder, W. M. (2002) *Cultivating communities of practice: A guide to managing knowledge*. Boston, MA: Harvard Business School Press.
12. Mathes, E. W. (1981) Maslow's hierarchy of needs as a guide for living. *Journal of Humanistic Psychology*, 21(4), 69-72.
13. トミヤマユキコ・清田隆之（2017）『大学 1 年生の歩き方 先輩たちが教える転ばぬ先の 12 のステップ』左右社。
14. 橋本陽介（2022）『中国語とはどのような言語か』東方書店。
15. 岡本雅子・村上正行・吉川直人・喜多一（2013）「プログラミングの写経型学習過程を対象としたつまずきの分析とテキスト教材の改善 ： 作業の自立的遂行と作業を介した理解のための支援と工夫」『京都大学高等教育研究』19, 47-57。
16. Onishi, H. (2016) The effects of L2 experience on L3 perception, *International Journal of Multilingualism*, 13: 4, 459-475.
17. 王松・古川裕・砂岡和子（2016）「日本の大学生の中国語学習動機づけ ： 全国 6 言語アンケート調査に基づく量的分析」『中国語教育』14, 103-126。
18. Berger, C. R., & Calabrese, R. J. (1975). Some explorations in initial interaction and beyond: Toward a developmental theory of interpersonal communication. *Human communication research*, 1(2), 99-112.
19. ブリタニカ国際大百科事典小項目事典オンライン版,ブリタニカ・ジャパン株式会社 https://kotobank.jp/dictionary/britannica/